

建国五十周年の中国とその将来

東京外国語大学
学長

中嶋 嶺雄

本講演は平成11年10月27日、如水会定例晩さん会で行なわれたもので、これはその要旨であります。(編集係)



本日は東京外国語大学とご縁の深い一橋大学の如水会で、私の専門とするテーマについてお話しする機会を得まして、大変光栄に存じております。

早速本題に移りますが、中国はこの十月一日に建国五十周年を迎えました。十五年ぶりに軍事パレードが行われ、まさに国威発揚を積極的に演出したわけであります。

けれどもその内実はどうかと申し上げますと、まず第一にあの「法輪功」事件をとつても明らかのように、今や中国共産党の指導性が脅かされているかのごとく、またそのレジティマシー

の根拠が問われていると思うぐらい、一種の擬似宗教集団が急速に膨張して社会に大きく根を張っていたわけであります。私はこの夏にも中国に調査旅行をかねて参りました。その頃は、アメリカに在住する「法輪功」の指導者・李洪志と「法輪功」に対して、徹底的な摘発がありまして、新聞でもご存知のようにブルドーザーでその出版物やカセットなどをひき潰すという、現代の焚書坑儒が行われていました。ではなぜここまで摘発に力を注ぐのかということをちょっとと見てみますと、現在中国共産党には六千百万の黨員が

いますが、「法輪功」のメンバーの方がそれよりも多いというのですね。私はたまたま長春に参りましたが、そこで「法輪功」の発祥の現場を見て、これは、言ってみれば、中国社会の中に大きな空洞ができているのだと思います。この空洞を「改革・開放」政策によつて満たされない人達、つまり「法輪功」の信者たちが埋めつつあったのであり、その「法輪功」はこの春に弾圧を受けて、抗議のため北京の南海に座り込んだわけです。日本のオウムのように計画的に人を殺したわけでは決してないのですが、あれほど大

がかりな摘発運動をやらなければいけないところに、今日の中国の政治と社会の大きなジレンマないしは深淵があります。

二つ目の内実としては、台湾の李登輝總統の「特殊な国と国との関係」という発言に対して、中国が李登輝批判を徹底的にやっていることです。中国の立場からすれば最大の国家目標は台湾問題を解決しての中国の統一なのですが、それがもう手の届かなくなる所になってしまった。ましてや今回の台湾大地震において被災民がしん吟している時に、中国の指導者が「一つの中国」を主張して「感謝」を表明したりしたものですから、台湾の人達の心は大陸からますます離れていきました。以上二つの事例はきわめて象徴的に中国の現状を反映しているという前提のもとで、今日の建国五十周年の中国を考えてみたいのですが、中国というと紀元前からの中華文明の遺産というものに囚われるあまり、今の中国がいかに古い国であるかのように見て

しまう。しかし現在の中国はまだ五十年しか経ってないのです。それを中国は古い国だと錯覚するところに、日本人が中国を見るそもその見方に根本的な誤りがありはしないでしょうか。

それからもう一つ強調したい点は、共産主義はもはや正統性の根拠を失い、二十世紀の過去のマイナス遺産として社会主義や共産主義が位置付けられているにもかかわらず、中国の政治システムは依然として、共産党の独裁体制であることの非現実性です。それを共産党は何としてでも死守しようとしているのが現状であります。

さて、ここでは常識的な目で中国を見てみたいのですけれども、まず中国の一人当たりのGNPは、これほど「改革・開放」で経済成長をうたわれたいにもかかわらず、現時点で米ドルに換算して約七百ドルです。それに対して日本は、不況や為替レートの変動しつてるとはいえ、三万数千ドルなのです。中国はどんなことをしても、予見しうる将来、豊かさにおいて日本に匹

敵するような存在ではない。中国は五十年の空白―後で述べます―の時期はおろか、清朝末期の頃も、実用主義的に欧米の科学技術の上澄みだけを輸入してきて、あとは中華思想でなんでもやれると言ってきたわけです。しかしその頃、我々の先輩はものすごく努力をしたわけです。単に技術だけではなく欧米の近代化の精神を学びとろうとしました。岡倉天心、新渡戸稲造、内村鑑三らはみな、東京外語の英語科で学びました。案外この事実は知られておりません。留学した夏目漱石、森鷗外そして外語のフランス語の学生で日本における洋画のパイオニアになった黒田清輝にしても、留学先でどれだけ苦労したか。日本はそういう歴史を背負って今日あるわけですけど、中国はその頃から全て中華思想に安住してきました。それで自ら失敗したわけです。日清戦争後の下関条約でも、日本に負けた理由を李鴻章は「中華思想にがんじがらめになっていたからです。」と伊藤博文に言っているわけです。で

すから、わが国と中国の間にこんなに大きな差ができたことは中国自身の責任であることを、中国の人たちにも、もつと考えてもらわなければいけないと私は思っています。

ではその中国が統一しようとしている台湾ですが、今や一人当たりのGNPが一万五千ドルになろうとしております。そんな豊かな国がはたして七百ドルの国に統一されようとするかどうか、中国は台湾の人びとが進んで統一したくなるような国造りをしているのかどうか。実は台湾問題の一番単純にして基本的なこの問題が、意外に見失われているのではないかと思います。

それでは香港はどうか。返還の時は一人当たりのGNPは二万三千ドルでした。だから大陸から香港へ逃げてくる人はたくさんいますが逆はありません。台湾も今大陸からの不法難民でひじょうに困っています。

この点について日本はどうか。よく新聞に中国からの不法難民が捕まったというニュースが出ていますが、彼ら

不法難民の九割は着実に日本に入ってきているようです。どんな不当なことをやっても不法でも、一カ月くらい稼げば、捕まった後国へ帰って一生働いても稼げないくらいのお金なのです。日本の外交当局は目をつぶっておりませんが、これはかなり深刻な問題です。

日本の各大学が入学許可をする、あるいは研究生として受け入れる留学生のうち、約三分の二が法務局の入国管理審査ではねられています。その大部分が中国人なのです。ということは、就学目的が異なる、又はその不法目的が法務局によつて事前にチェックされているわけです。できるだけ留学生を受け入れたいという、今の日本の現実とは裏腹になっているわけです。

香港の話に戻りますが、はたして香港の人たちは本当に大陸に統一されたかったんでしょうか。私は香港返還は歴史的失敗だと思っています。その証拠に返還後香港は崖が落ちるようになつてきました。まさに閑古鳥が鳴くような状況です。先月たま

たま香港で講演をする機会があり、私自身長く住んでいて町の様子もよく知っているんで、一時間ほど繁華街を歩いたところ、あのいつも満員だったペニンシュラホテルのティールームでもお客が四分の一位しか入つてない。フェリーの乗り場も人がまばらになっていました。そして日本人の観光客に一人も会わなかった。もともと香港はイギリス的なものとアジア的なものがミックスしたところに魅力があったのですけど、中国のコントロールが及んで、「一国兩制」ではなく、まさに中国化してしまいました。

例えば、人民元が香港ドルとほぼ等価で交換できるようになったことで、人民元が香港まで進出してきました。それから、最近では香港は、広東語に代わつて北京語の世界に急速になりつつあります。観光パンフレットまで一部は大陸の簡略字になっています。これらの現象だけではなく、まさに香港の民主主義、言論の自由がものすごく拘束されてしまいました。深層心理で

分析すると、江沢民さんを中心とする中国の指導者はほとんど上海閥であり香港が強くなって、広東省といつしよに、広東語の世界のアイデンティティを強めたら、台湾の二の舞になるのではないかという危機意識を持っているのではないかとも思われます。

これらの問題を考えますと、なぜ香港がだめになったのかが分かります。返還前はチープ・ガバメントの典型であった香港、関税がなく、税金天国で経済は繁栄し、金融センターとしては東京を上回るのではないかという勢いでした。それが今非常に厳しい状況に置かれています。それから、日本から次々と進出したデパートも、あの有名な香港大丸までこの二、三年の間に次々と撤退してしまいました。香港の『新報』は日本の日経に匹敵するような新聞ですが、これもちよつと中国に批判的な記事を書く、株式相場などの「公告」さえも載せないように中国当局は圧力をかけます。そして返還の翌日からタイのパンツがヘッジ・ファ

ンドに襲われ、次いで香港ドルへのアタックがありました。そこで香港の金融当局はものすごい香港ドル防衛をやりました。その結果、町には米ドルがほとんどなくなつて、商品も投げ売りです。しかし九掛けで割り引いてもお客さんがつかない状態でした。そして二度目のアタックがありました。これによつて香港ドルがグラグラツときて株式相場は三分の一になるといふ大暴落。やはりこの原因は結局は中国化を急ぎすぎた中国当局の政策の誤りにあると言わざるを得ないと思うのです。

中国は、建国五十年のうち最初の三十年間はまさに毛沢東思想のカスミを食つて「貧困のユートピア」を求めてきました。その後「改革・開放」が本格化した後もいろいろ問題が出てきております。この二十年間、平均九%の成長をしているながら産業構造の転換はほとんど行われていないのです。農村人口がまだ圧倒的に多いのも大きな問題です。だから台湾が小さい国でも、李登輝さんの学位論文「台湾における

農工間の資本移動」にもありますが、キャピタルフローのおかげで、現在はアメリカの農産物を輸入して台湾のバイオ・ハイテク製品を輸出するというふうな、昔に比べて産業構造が根本的に変わつてきています。

しかし中国では先ほど述べた「貧困のユートピア」の典型としての人民公社が八〇年代のなかばにあつたという間に消えてしまったことに象徴されるように、結局なんにも蓄積されなかつたのです。そしてそもそも建国直後から無理が多かつたのです。中国の国旗、あの五星紅旗が本来意味するところは、大きな星が中華人民共和国のシンボル、そのまわりの四つの星はそれぞれ労働者階級、農民階級、小ブルジョワジー、そして民族資本家を意味するのです。つまり共産党の独裁ではなく人民民主主義独裁連合政府のはずなのです。ところが、建国直後から立ちどころに共産党の独裁が始まつていきます。しかも中国革命から社会主義改造の過程でどれだけの人が犠牲者として

死んでいるのか。その後の大躍進政策でも同じです。その失敗の責を負わざるを得なくなつた毛沢東は文化大革命に突つ走り、さらに二千万から八千万の死傷者が出ました。その上でのあの天安門事件の悲劇です。事件後の十年間は、力によつて押さえようという政策に急速に転換してききましたので、ここにもきわめて大きな問題が残されていると思うのです。結局、中国は建国五十年間の空白が大きすぎる。

他方この十年余の台湾を見ると、李登輝總統のリーダーシップのもとに全く新しい民主国家が育ち、経済的にも、社会的にも著しく成熟してきています。学術水準も非常に高い。そして一九歳まで日本で育つた親日家でもある李登輝さんが、頑固な外省人が周りを取り囲む中、台湾人としてのアイデンティティーを一つ一つ確立してきています。その彼の台湾がいかに魅力を持っていたかは、司馬遼太郎さんの『台湾紀行』をご覧になると分かります。どちらかといえば日中友好派であ

つた彼が、晩年台湾に行つて李登輝さんと会い、台湾の庶民の人たちと触れ合つてものすごく共感する。ある意味では日本が失つていたものが台湾に残つていたという気持ちもあつたのでしよう。日本は台湾と国交がありませんが、大学や民間レベルでできるだけのことをしていくことが、日本にとつても非常に重要なことだと思えます。李登輝さんの人一倍嫌いな言葉は「中華」という言葉。あの一種の中華思想の上になんぞ安住しているから世界が見えないといわれる。先に述べました長春訪問ですが、そこで東北師範大学に行きました。日本の対中国友好外交の一環として留学生のための日本語教育のお手伝いをしていられる日本語予備学校の二十周年式典に招かれたのです。そこに長春の若い副市长が出てきてふんぞりかえつていられる。心からの感謝の気持ちぐらゐその場で言つて欲しかったのですけれど。しかも中国側は援助に関する要求を次々にエスカレートさせてくるのです。とにかく日本人は相手が中国だ

と自尊心を失つて、ロー・プロファイルであれば無難だと思つていられるので、これは根本的に考え直さなければいけません。

では戦争責任の問題はどうかといえれば、戦後日本は一度も軍事力によつて物事を解決しようなどとはしていません。こと自体が戦争責任を立派にとつていることなのです。そんな日本が毎年国防費を対前年比二ケケタ台で増大させている中国に軍国主義だと言われるのはおかしい話です。また環境や人権といった国際公共財に関しては日本がきちんと中国に言うだけではなくて、中国自身もつと協調的になつてくれないと困るのです。そのためにはどうすればいいか。中国はしばらく軍事的強権体制を強化していくと思えます。ですから不法難民の問題に限らず、日本としてもしつかりとした安全保障体制を作つておかなければならない。その基本は日米協調であるべきで、そうでないと中国が発する諸々の脅威には対処できないでしょう。だが同時にこれが

ひいては中国がいい国になっていくための一つの方策ではないかと私は考えております。

ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

出席者(敬称略・年度順)

泉三義、太田寿吉(昭9学) 武末隆夫、西沢岩松(昭12学) 月岡昌(昭13学) 山本敏郎(昭13門) 上金忠夫(昭14門) 伊藤達二(昭16学) 片柳梁太郎、小寺喜一郎、野村好夫(昭16学後) 浅井浦二朗、川島芳郎、川田嘉一郎、岸本純一、鈴木和夫、長江鉦午(昭19学) 岡本倬(昭20門) 鈴木英夫、立野健三(昭21学) 永井正(昭22学) 篠宮勲、真野弥太郎、横山武雄(昭23学) 大塚秀二、田中達男、松本章三(昭23門) 内田英邦、平野鹿蔵(昭24学) 赤沢弘三、金子元英、志村文一郎、谷本隆、中村敬太郎、長谷川誠治、藤井治(昭25学) 冲正一郎、中村家久(昭26学) 大沢俊夫、柿添猪三郎、名取誠

(昭27学) 石井祐二、近藤鉄雄、高橋強、宮部義一(昭28学) 高木昭治(昭28商) 矢田部健雄(昭29学) 笹谷隆美(昭29商) 野村正(昭29経) 家倉久明(昭29法) 中山光雄、橋口修一(昭30商) 和泉恭平、森田純穂(昭30経) 金承浩、高橋宏、平川順一(昭31商) 桜井栄、寺内久夫、野間口至、横瀬一郎(昭31経) 加野忠、橋国雄(昭32経) 片山一久(昭32社) 西井正臣、御手洗健(昭33経) 河内拓爾、馬場一男(昭33法) 井上貞郎(昭33社) 石原繁、小路英明、丸山直行(昭34商) 影本昌則、金沢園雄、菊池康夫(昭34経) 又平恭允(昭35商) 茂木賢三郎(昭35経) 石川直義、河野正(昭35法) 鈴木秀一(昭35社) 勝又道雄(昭36経) 野々垣勇、柳沢健治(昭37商) 富川一男(昭38商) 東條巖(昭38社) 松島源吉(昭39社) 宮島千倉(昭40商) 瓦林秀嗣、中村洋一郎(昭40経) 羽田弥(昭41商) 横田勝介(昭48商) 藤岡澄人(昭48社) 山

本雄司(昭56商) 山本事務局長(昭31商) 白石業務部長(昭35法) その他1名

以上九六名

